

## 「神の栄光を現わし、永遠に神を喜ぼう」

1999年11月16日教会成長協議会

山梨栄光教会 牧師 関口 康

### はじめに

本日の教会成長協議会には、わたしたち山梨栄光教会の紹介というテーマを取り上げていただき、心より感謝いたします。すでに二人の教会役員から、発題をさせていただきました。岩間長老からは、主に教会のこれまでの歴史的歩みについて、また雨宮執事からは、とくに一昨年11月に完成しました新会堂の建築について、それぞれお話しいただきました。このお二人の発題は、いわば「これまで」の話です。わたしが今からお話ししようとしておりますのは「これから」の話です。夢のような話になるかもしれません。いや、言ってみれば、すべては夢であり、雲をつかむような話です。しかし、たしかに夢ですけれども、みなさんに聞いておいてもらえば、その夢にも責任が生じると思います。同じ夢でも、それを実現するための計画を立てて、実行に移すことができる、そのような責任のある夢にしていくことが大切ではないかと思しますので、とにかくみなさんに聞いておいていただきたいと考えて、ここに臨んでおります。

### 1、山梨県内で唯一の日本キリスト改革派教会

まず最初に、山梨栄光教会のこれから、を考えるとときに、わたしにとって非常に大切な問題と感じていることは何か、という話から始めさせていただきます。それはごく単純な話です。

わたしは、山梨栄光教会という教会を、いつも、「山梨県内で唯一の日本キリスト改革派教会」であるという視点から見ている者です。これがわたしたちの教会のいわば本質であり、性格であり、また魅力でもあると考えております。もしこの教会が「改革派教会」であることをやめるならば魅力を失う、とわたしは感じています。しかし、これまでも、そしておそらくこれからも、山梨栄光教会が「改革派教会」であることをやめて別の性格を持つ

教会になっていくということは、決してあってはならないことですし、またありえないことであり、そんなことを望んでいる人は、わたしたちの教会の中には誰一人おりません、ということを経験して申し上げておきたいと思います。

しかし、わたしたちは、山梨県内で唯一の改革派教会、としての歩みを続けていくことには、非常に大きな困難や厳しさがあるということを経験して、やはり思わざるを得ません。それは、わたしたち教会の内側にいる者たちが、改革派教会の枝である自覚を失いかけているとか、改革派信仰というものに確信を持ってなくなっているというような意味ではまったくありません。わたしの申し上げたいことは、教会の内側の問題ではなく外側の問題、より厳密に言えば、「教会の壁の内側」と「教会の壁の外側」との関係のなかで起こってくる問題です。具体的に言えば、教会の外側にいる山梨県の人々の目から見て、山梨栄光教会がどう映っているか、その人々がわたしたちのことをどのように見ているか、という問題を考えていくときに、わたしたちの教会にはやはり大きな困難があり、厳しさがある、と言わざるを得ないように思うのです。

これからお話しすることは、わたしが何か科学的に論証したことではなく、言ってみれば、わたしの感性が捉えた印象に過ぎない話ですので、適当に聞き流して下さって結構です。しかしわたしは、山梨県の人々は、キリスト教というものに対して悪いイメージを持って捉える、ということがあまりない人々ではないか、という気がしています。むしろ、とても好意的に捉えて下さっている方々が多いのではないのでしょうか。山梨県内にキリスト教人口がどれくらいいるかについて、正確に統計的なことを調べたこともありません。しかし、おそらく決して少ないとは言えないのではないかと予想しております。

教会の数は、割合たくさんあると思います。たとえば、日本キリスト教団の教会は、県内に15教会あります。これは東京などと比べたらはるかに少ないわけですが、同じ規模の人口を持つ他県と比べたら決して少ないとは言えません。また県内には、古くからカナダメソジスト教会の宣教師が建てたキリスト教主義学校である山梨英和学院がありまして、県内に強い影響を及ぼし続けていると思います。そのおかげで、これまでのところわたしは、山梨県の人々が、キリスト教というものに対して激しい敵意をむき出しにしてきたという場面に立ち会ったことは、まだありません。それどころか、町内会の集まりなどに出ましても、どちらかと言えば、キリスト教そのものに対しては好意的な印象をもって下さっている方々が多いような気がするのです。

一説によりますと、山梨英和学院というこの学校は、昔からどちらかといえばいわゆる上流と呼ばれてきた人々の層の子どもたちが通う学校として有名で、そういう意味で県内の人々に対するキリスト教のイメージというものも、わりあいハイソサエティの雰囲気をもって受け止められてきたそうです。わたしたちの教会のCSにも、山梨英和の中学生や高校生が毎週通ってきてくれますが、どの子どもとても素直で、明るくて、また成績優秀であると感じます。そういう伝統が山梨県のキリスト教の雰囲気を作り上げてきているのではないのでしょうか。

また、今お話ししたと直接関係あるかどうか分かりませんが、山梨県内のキリスト教会は、とにかく横のつながりが非常に強くて、お互いがとても仲が良いということは、特筆すべき点です。県内に、「山梨県教会一致懇談会」という超教派の組織がありますけれども、これには、カトリック教会も、聖公会も、教団も、ルーテルも、バプテストも、福音派も、みんな集まって、ワイワイガヤガヤと一緒にクリスマス会をしたり、イースターの墓前礼拝をしたり、新任教師歓迎会までしてしまう。わたしはこれまで、教会同士が教派の内部や教派を越えたところで、寄ると触ると大喧嘩をしている地域、というのはいくつか経験してきました。しかし、クリスチャンたちが教派を越えてこんなに仲の良い関係を保っている地域を、わたしはこの山梨県以外に知らないのです。ああ、クリスチャンってこんなに平和で朗らかな人たちの集まりなんだなあ、ということを知り、わたしはちょっとしたカルチャーショックを受けたほどなのです。

教会の外側の人々が、キリスト教に対して、比較的好印象を持っているのではないかと想像できるその地域状況の中で、わたしたちは、山梨県内唯一の日本キリスト改革派教会として立っているというわけです。そこで、わたしが何を感じているか、と申しますと、あっさりしたところを申しますと、わたしたちの教会の名前である「改革派教会」という言葉から想像されるイメージは、山梨県の人々の抱く、明るくて、豊かで、穏やかで、やさしくて、仲の良いクリスチャンというイメージから、非常に大きくかけ離れているのではないかと、ということなのです。

以前、わたしは、中会の連合長老会の場所で発題させていただきましたときに、こんなことを申し上げました。「改革派教会」というのは、少なからざる日本人の耳で聞いて、非常に過激な響きを持っている名前であると思います、というようなことでした。改革派で生まれ育った方々には分からないかもしれませんが、外側の人々がこの言葉から抱く印象

は、明らかに社会に騒動を引き起こす闘争の拠点というイメージです。以前の発題の中で、新会堂ができたその日に、警官が教会を訪ねてきて、牧師であるわたしが長時間職務質問を受けた、というお話もしました。「改革派っていったい何ですか。あんたがたは何を改革しようってんですか」と聞かれました。そのときわたしは、かなり丁寧に「改革派」の意味について説明しましたから、その警官はまあまあ納得してくれたと思います。しかし、そういう説明の機会を持つことができない大勢の市民は、わたしたちの教会の看板を見ながら、ある種の恐怖みたいなものを抱いているかもしれない、ということ、やはり考えざるを得ないのです。

しかし、わたしは、このように考えるからと言って、「改革派」の看板を降ろすべきだと言いたいわけでは、もちろんありません。この点は絶対に誤解されては困ります。わたしは、この看板のもとで働きたいという願いをもって、改革派教会に加えていただきましたので、この看板を生涯大切にしていきたいと願っている者なのです。

ただ、しかし、わたしたちの教会の看板が持っている強烈な印象に対して、誤解や偏見、またとても不愉快な思いをもって見ている人たちは決して少なくないのだ、ということ、わたしたちは、どこかでよく自覚しておく必要はあるだろうな、と考えているだけです。キリスト教の教会というのは、もっと穏やかで善良な人々の集まりであり、お互いが仲良くしている人々だと思ってきたのに、この教会は、「改革」とか「派閥」とか、なんだか物騒な名前の教会だなあというような警戒心を持っている人は多いと思います。事実、わたしは同じ町内の組の集まりに最初に出たときに、この点について何人かの人々から、かなり突っ込んだところの質問をされました。ほとんど同じ質問です。「改革派って何ですか。あなたがたは何を改革しようっていうんですか」。そのように面と向かって質問をくださる方々は、よいわけです。わたしが、いくらでも説明をさせていただきます。しかし、そうではなく、ただ誤解して遠巻きに見ているだけの人々がたくさんいるだろう、と思うのです。実にわたしたちは、そういう人々に向かって伝道しなければならないのです。

そして、そのときにわたしたちがしなければならないことは何かと考える。

何よりもまず第一に、「日本キリスト改革派教会」という名前の教会は、恐ろしい人たちの集まりではないし、また同じ宗派の中で派閥争いに明け暮れている人たちの集まりでもないのですよ！ それどころか、まさに、明るくて、豊かで、穏やかで、朗らかで、やさしくて、仲の良い人々の集まりなのですよ！ということ、みんなによく分かるように説明し、安心していただくことから始めなければならないと思う。それが、わたしたちの伝

道の第一歩でなければならない、とわたしは考えているのです。

そういうなかで、第二に、わたしのごく個人的な願いながら、ぜひ実現できたらよいと考えておりますことは、ズバリ、できるだけ早い内に、山梨県内に第二、第三の改革派教会が生まれてほしい、ということです。とにかく、何が困ったことかと言えば、今の山梨県の中で、「改革派」の牧師は、わたし一人だけであるというこの点は、本当に困ったことです。希少価値はあるかもしれませんが、非常に危険な状況である、とあっていただきたいわけです。せめて、あと一つか二つ改革派教会が生み出され、せめてあと一人か二人改革派の牧師さんに来ていただきたいと願っているわけです。たとえば、もし今後CRCの宣教師の方々が新しく伝道所を開設されることを望まれたとき、あるいはまた、中会の次の記念開拓伝道の折などには、ぜひ山梨県で始めてほしいと、わたしはひそかに願っているのです。

しかし、今の物言いは、やや他人任せ的な言い方でありますので、無責任との誹りを免れないかもしれません。誰か来て、教会を建ててください、というだけではなく、わたしたちの教会が新しい教会を生み出さなければならない、ということも、これから真剣に考えていかなければならない課題として出てくるに違いありません。今はまだ、そんなことを考える余裕もありませんけれども、しかし、まったくわたしたちとは無関係な話と聞き流してしまうこともできないことだと思います。

今日の集まりは改革派の教会成長協議会なので、わたしの教団での体験について語るのはやや場違いかもしれません。しかし、少しだけ参考にさせていただきたい話があります。というのは、わたしが以前、教団時代に働いていた高知県の教会の話です。その教会は、創立20年、現住陪餐会員50名になった段階で、自給開拓伝道を開始し、その教会附属の伝道所は、開設10年で独立しました。その開拓伝道のわざにわたしも途中から参加して、6年間いろんな経験をさせられました。それはそれは、聞くも涙、語るも涙の話です。本当に苦労しました。会員50名で自給開拓など無謀であると、周りの教会から非難轟々を受ける中での歩みでした。わたしが赴任する前に、たったの3年間で二人の牧師が伝道所を去って行きました。わたしは6年働きましたけど、わたしの次の牧師はまた、たったの2年で辞めました。牧師も教会員もみんな、心も体もボロボロになるほど、喧喧譁譁やりあったこともあります。しかし、その伝道所は10年で独立し、現在土地・建物で七千万円に及ぶ新会堂を建築中、まもなく完成いたします。そういうことが教団の教会にできるのです。だから、改革派の教会なら必ずできる、とわたしは信じています。

幸い、山梨栄光教会の新会堂は、礼拝に60人くらい集まるようになれば、もういっぱい、と感じるほどの大きさです。この規模は、適当な大きさであるとわたしは感じております。ここに入りきれなくなったら、別の土地に新しい教会を建てていくことで補えばよいわけです。一つの教会に大勢の会員が与えられることも大切かもしれませんが、しかし、山梨県には、せめてあと二つくらいは、改革派教会がなければならないと、わたしは思います。なぜ一つしかないのか、不思議に思うくらいです。その意味で、わたしは、将来の山梨県に大きな規模の一つの改革派教会ではなく、小さな規模でもいいからできるだけたくさんの改革派教会が立つことを願いたいのです。

以上の話が、山梨栄光教会のこれから、を考えるとときのいわば大枠組みであると思っただきたい内容です。しかし、これは現段階では、長期計画というにも値しない、実現の可能性をイメージすることさえ難しい、まったくの夢物語に過ぎません。そういうわけで、今日のところは、大風呂敷を広げたような話だなあ、と思いながら聞き流していただければよいかと思えます。

## 2、山梨栄光教会の現況

次に、現在のわたしたちの教会の状況についてお話ししたいと思います。ひとしきり将来の夢を語ったあとに、現在のわたしたちの教会のありのままの裸の現実をご紹介しますことには意味があると感じます。まさに夢は夢、現実が現実、という二つの事柄のギャップを目の当たりにするとき、少し暗い気分にもなります。しかし、わたしたちは、だからと言って、現実から目をそむけて夢だけ語るというわけにも行かないのです。

現在の会員の構成を申し上げます。現住陪餐会員のみに限ってご紹介いたします。

現在の会員数は28名。そのうち有職者は16名、無職の方が12名いらっしゃいます。年齢層で分けてみますと、0～19才までが0名、20～29才までが2名、30～39才までが2名、40～49才までが5名、50～59才までが13名、60～69才までが2名、70才以上の方が4名です。

この構成を、みなさんはどのようにご覧になるのでしょうか。わたしの考えでは、この構成は、教会にとって割合バランスが取れたものではないかと思っております。

まず、会員数の中の「有職者」の割合は、教会の運営という観点から見れば、非常に大

きな問題になってくるものです。とくにそれは、献金の額の問題になります。主婦や高齢者など無職の会員が多いことは、マイナス面で捉えられることもありがちです。しかし、わたしは、このことについては、一概には言えない面もあると考えております。今から申し上げることで、有職者の方々を責めるような意味はまったくありませんけれども、事実として、有職者は、仕事の都合といったは礼拝や諸集會を欠席せざるを得ない場合が多いわけです。日曜日以外の時間を使っての奉仕活動なども、有職者に参加していただくことは、事実上無理です。その面では、教会の活動は、少なからず無職の方々によって支えられているわけです。ですから、教会の活動や奉仕という観点からすれば、教会にとって、有職者と同じくらいに無職の方々が必要なのです。

また、会員の年齢層についてご紹介しました。未成年はゼロです。また20代の2人は、たしか来年には30代に昇格されます。現在の30代の2名はわたしたち牧師の夫婦です。そこが最年少の層である、ということです。そして、現在の会員の中で最も多いのは、50代の方々です。わたしとしては、今の50代の方々にはあと30年がんばってください、と申し上げております。この方々が健在であるかぎり、少なくともあと30年は山梨栄光教会の歴史が続いていくであろうと、そう思っているわけです。しかし同時に次の世代が育っていく必要がある。あと30年後には、わたしも64才にならせていただき、わたしの子どもたちがわたしくらいになるわけで、そのくらいの先を見ながら、教会の将来を考えていくことが大切ではないかなと、のんびり構えているところです。

次に、会員のご家庭の住んでいる場所の地域分布をご紹介します。

半径5キロ圏内(自動車で10分以内)に15名、半径10キロ圏内(自動車で20分以内)に8名、半径15キロ圏内(自動車で30分以内)に3名、半径30キロ圏内(自動車で1時間以内)に2名の会員がいらっしゃいます。この距離という問題は、教会生活を続けていくためにじつは非常に重要な点ではないかと、わたしは考えております。

また、この距離の問題は、たとえば、もし今後、新しい開拓伝道所を作りたいという志が、わたしたちの教会に、あるいは東部中会に与えられた場合、重大な問題として浮上してくるはずですよ。とにかく今、県内の改革派教会は、わたしたちの教会だけなのです。山梨県内に新しい改革派教会を作るときも、山梨栄光教会との関係なしに始められるということはないでしょう。その意味で、とにかく今は、わたしたちの教会を中心点として、コンパスで円を描くように伝道のエリアを広げていくことが大切ではないかと考えさせられております。

以上が、わたしたちの教会の現状です。

### 3、今後の伝道の具体的方策

それでは、これからわたしたちは、どのようにして伝道を行い、教会の会員を増加していかなければならないのか、そのための道は何かということについて、お話ししたいと思います。

教会の会員が増えていくための道は、そんなにたくさんあるわけではありません。

第1に、会員が自分の子どもを出産し、幼児洗礼を施すこと。これはある意味で、最も確実に増える方法かもしれません。

第2に、契約の子が信仰告白すること。契約の子たちは、厳密に言えばすでに会員なのでありますが、いわば大人の会員になり、教会のすべての活動に責任を負うことができるように成長するという、これが契約の子の信仰告白において求められてくることではなからうかと思えます。

第3に、改革派内外の他の教会の会員が転入する。改革派教会の現実において、この道によって会員が増えている教会は少なくないと聞いておりますが、みなさま、それは本当のことでしょうか。たとえば、あっさりとした言い方を許していただければ、他の教派で躓いた人が、改革派教会に希望を抱いてやってくる、というケースでありましょう。わたしやわたしの家族も、その中に数えていただいてよいケースです。教会の現実を考えると、この道を通してやってくる方々の問題を無視することはできないと思えます。わたしはときどき「改革派教会の方々には、ぜひ日本キリスト教団の人々に伝道していただきたいです」というようなことを、半分冗談、半分本気で、申し上げることがあります。ただのお節介かもしれません。しかし、自分たちは聖書をよく学び、キリスト教をよく学んでいる人々にこそ、わたしたちの改革派信仰を伝えなければならない場合があるのではないかと、思うことがあるのです。

そして第4に、求道者が受洗すること、が来ます。少し過激な響きを持つ表現を使えば、異教徒が回心すること、がこれに当たります。この第4の道に対して、第1から第3までは、異教徒が回心するという話ではなく、クリスチャンの家庭の中での信仰教育

や家庭教育の中で行われる伝道という内容をもった話であるわけです。その意味で、第1から第3までは、身内に向かって行う伝道という言い方ができ、第4の伝道は初めて他者に向かって行う伝道と呼べるのではないかと区別して考えることができるように思うわけです。

そして、わたしは今、伝道の道を4つに区別しましたけれども、それら4つの道を全部通っていかなければならないと考えております。今申し上げた4つの道のどの道も疎かにされてはならないのであって、それぞれの道に沿った方策を立てて行く必要があると思います。

まず第1の「教会員が自分の子どもを産み、幼児洗礼を授ける」という道において大切なことは、まず青年たちが結婚することから話を始めなければならないのかもしれないかもしれません。しかし、こればかりは、周りでとやかく言ったところで、どうにもならない面があります。教会にできることは、青年たちの結婚のお世話をするくらいです。そして、結婚すれば、やがて子どもが産まれるであろう、ということ期待する。子どもが与えられない家庭のことは十分に配慮しなければなりませんけれども、子どもが産まれた家庭にはそれなりの苦勞がありますから、小さい子どもを持つ若夫婦を励まし、助ける働きも、教会にはあると思います。今のわたしたちの教会では、牧師家庭をはじめ、数名の方々が小さい子どもを抱えて苦勞している最中です。今は何の組織化もできていませんけれども、様子を見ながら、若夫婦の会を作るなどして、お互いの家庭について祈り合い、励ましあうことができたらよいのでは、と考えているところです。

次に第2の「契約の子たちが信仰告白をすること」。これは、わたしたちの教会においては、本当に心から真剣に祈っている課題の一つです。わたしたちの教会には、現在21名の未陪餐会員がいます。いわゆる幼児会員でありますけれども、本当の幼児はわたしの二人の子どもくらいでありまして、ほとんどは20才あるいは30才を越えた「幼児会員」です。この21名が全員信仰告白をしてくれたら、わたしたちの教会は、50名の教会になります。しかし、現実はそのようにならない。ここにみんなの重荷があると言えるわけです。この点を何とかしたい。家族というのは最も難しい相手であると言われるので、みんな頭を抱えながら、しかし、手も足も出ないというところで苦しんでいるのだと思います。何か良い知恵があれば、何でも教えていただきたいと思います。そして、ぜひお祈りいただきたいと

思います。

第3の「改革派内外の他教会の会員が転入すること」については、そのために方策を立てるとするのは、少しおかしな言い方もかもしれません。しかし、わたしはこのことについて一つの考えを持っております。わたしたちの教会の場合、改革派内の教会からの転入については、すべて他県の教会からということになります。その意味で、他県の教会、とくに中会内の教会との関係において、聖書や教理についての理解がかけ離れたものにならないように気をつける必要があると思っております。しかし、他の教派からの転入会という話になりますと、県内の教会から移ってくるという場合が多くなります。ここで、先ほどお話した、山梨県内のキリスト教事情という問題に関わってくるわけです。「県内唯一の改革派教会」に対して、いろいろな誤解や偏見がある。この誤解や偏見をもってわたしたちを見ている人々の中に、わたしたち自身が深く入って行って、この誤解や偏見をあらかじめ解いておく必要がある、とわたしは考えているのです。たとえば、先ほどの「日本キリスト教団に伝道する」というわたしの言い方は、たしかに、非常に過激な発言でありますけれども、教団の中には、他の教派以上に、キリスト教の理解の上で信仰的に確信をもてないで苦しんでいる人々は、じつはたくさんいることを、わたしは知っております。その人々を教団から救い出すなどということは、要らぬお節介以外の何ものでもないかもしれませんが、せめてその人々に、わたしたちの教会の信仰のあり方をお伝えしておくことができるかもしれない。そんなことを考えさせられているのです。

そして、そこでわたしたちにできることは、とにかく県内の超教派の交わりなどがありましたら、できるだけそこに顔を出し、機会あれば発言し、理解を求めていくことが大切であると思えます（ただし、実際には、中会などで東京出張の機会が多くなると、地元の教會的集まりに出席することができないジレンマはあります）。「山梨県教会一致懇談会」には安達先生も熱心に関わっておられたと伺っております。またわたしは去年から、県内にある日本長老教会と日本同盟キリスト教団の若い牧師たちを集めて、月1回の勉強会を始めました。そこで学んでいる内容は、日本キリスト改革派教会の教義学です。神戸改革派神学校でわたしが牧田校長から学びました教義学の内容を、教派を越えて学んでいます。そういう積み重ねが大切ではないかと思っているのです。

そして第4の「求道者に洗礼を授けること」。このことのために、わたしが心がけてい

ることについてお話しして終わりにしたいと思います。

現在、わたしたちの教会の礼拝に比較的定期的に出席して下さっている純粋な意味での求道者は、2、3名というところです。クリスマスやイースターには出席するという方なら、もう少しいます。しかし、みんな仕事で忙しい方々ばかりなので、求道者会を開くこともできていません。ただ、わたしとしては、その方々に対して、とにかく教会という場所の雰囲気馴染んでいただくことが先決であると考えて、あまり強く迫ったりしないで、見守っているところです。

また、教会学校の生徒たちは、広い意味での求道者であると思います。現在、教会学校には、常時5～10名近い子どもたちが通ってきてくれています。この子どもたちを何とか大切に育てていきたいと思っています。とくに今考えておりますことは、今年のクリスマスに、わたしたちの教会にハンドベルを寄贈して下さった会員の方がいらっしやいまして、このハンドベルを用いての伝道という可能性が出てきた、ということがあります。子どもたちにとって楽しくて、意味のある活動を盛り上げていきたいと願っております。

そのようにして、わたしは、これからもっともっと、教会に求道者が与えられることを願っております。そして、その方々を導いて、何とか洗礼を受けていただくことを祈っております。しかしそのためには、牧師を含めてその方々を受け入れる側の今の教会員たちが、信仰者としての模範的な生き方を示さなければならない、と考えております。

その場合の、信仰者としての模範的な生き方とは、いったいどういうものなのか。わたしは、このように考えております。教会員は神様との契約に基づいて礼拝に忠実に出席するという事は、もちろん大切なことです。しかし、「伝道」という観点から見れば、教会員は、その意味での教会の定めに忠実であるという模範を示すだけではなくて、それと同じくらいに、一般市民として教会の外側にいる人々に向かって模範的な生き方を示す必要があると言わざるを得ないのです。それはどういう意味かと言えば、教会員が自分の家庭や職場や地域社会での責任を無視したり放棄したりするような仕方で、教会の定めに忠実であるというだけではどうしても足りない、という意味です。わたしたちの教会では28名の会員中、有職者が16名いると申しました。月曜日から土曜日まで休みなく働かなければならないだけではなく、日曜日働かなければならない方々が、たくさんおられます。また、地域の集まりなどで日曜日にも責任を負わなければならない年齢層の方々も多くおられます。その方々から日曜日の礼拝を休まなければならないという連絡をいただいたときに、わたしは、その方々があまり後ろめたい気持ちを持たなくてもよいように、「どうぞ

しっかり働いてください」と申し上げることにしています。この言い方は、完全に間違いだ、とご批判を受ける点かもしれません。しかし現時点でわたしは、この世での働きを疎かにしてでも教会の礼拝に出てこなければならない、という考えは持たないようにしているのです。

「伝道」の観点から見ることの大切さを理解していただければ、わたしのこのような考えは間違いとは言えないことを理解していただけるのではないかと期待しています。山梨県だけではないと思いますが、わたしたちの教会を外側から見る人々の立場に身を置いて考えてみたときに、教会があまりにも「反社会的集団」のように見られることは、百害あって一理はない、と感じます。イエスさまは、「あなたがたは世の光である」と教えておられます。「世の人々が、わたしたちの立派な行いを見て、主をあがめる」というのは、どのような場合に起こるのだろうかと考えさせられます。教会員一人一人が、教会の奉仕に忠実であるように、この世の仕事に忠実であることが、この世に対するわたしたちの証しではないでしょうか。

もう一つ、求道者に洗礼を受ける、という教会の務めに関して、申し上げておきたいことは、そのために、牧師はやはり何としても教会のある地元にはしっかりと足をつけ、根を張って働かなければならないだろう、ということです。しかし、残念ながら、今のわたしは、どうもそれができにくいと感じています。あまり簡単に他人のせいにはなりませんし、ちょっと言いにくいことでもありますが、昨年1年間のことを思い返してみても、やはり言わざるを得ないことは、中会の教師会や委員会などで、東京あたりに出張する回数が多すぎる感じが、どうしてもします。この回数を何とか減らす必要があると感じております。そうでなければ、わたしは山梨県の人々に伝道する、ということは無理ではないかと思うのです。県内唯一の改革派教会で働く県内ただ一人の改革派牧師であるわたしが、山梨県の中にいる時間が少ないならば、どうして伝道が進んでいこうかと思えます。

そういうわけで、ぜひ今後、大会や中会の委員を選考していただく場合には、わたしの名前を忘れていただいて、君は地元には張り付いて働きなさい、と命じていただきたい、とそう願っておりますので、よろしく願います。

以上、まとまらない話をご清聴いただき、心から感謝いたします。